# 田端で芽生えた愛郷心

## 文人の武蔵野

### 芥川龍之介 ②

牧場脇に実家のあった新宿時代、学生だった芥川龍之介は、国木田独歩の「武蔵野」を読み、武蔵野の秋を求めて多摩川を遡り村々を訪れます。他方で芥川が故郷を想うのは、幼少期に親しんだ大川(吾妻橋から先の隅田川下流)の水でした。

やがて芥川は、田端に新築した家に移り住みます。引っ越したばかりの頃、「東京の印象」を文芸誌に問われた芥川は、大川を含めて今の東京に美や情緒はほぼない。郊外も嫌いである。今住んでいる田端も郊外だが「所謂武蔵野」の「安直なセンティメンタリズム」が見えるのが厭だ、と回答しています。

芥川は独歩の「武蔵野」を愛読した文人の一人でしたが、独歩の追随者たちが次々と著す武蔵野については、美や斬新さという観点から否定的にみていました。

芥川の嫌う「所謂武蔵野」とは、独歩の作品に導かれて多摩川沿いを歩いて発見した秋の武蔵野とは異なるはずです。田端のような郊外の新開地は、大量生産された武蔵野の一つに見えたのだと思われます。下町生まれの東京人としては、都落ちの意識もあったのでしょう。

まもなく田端には芥川を慕って仲間が集い「文士村」が形成されます。その中心にいた芥川が田端を嫌いだとしたのは、住んで間もない時期だったからかもしれません。関東大震災後には、田端で自覚した「愛郷心」に言及しています。

芥川の心象地理には、田端に代表される紋切り型の郊外の風景としての武蔵野と、多摩川上流の日野や立川、豊田の水辺空間で毎秋に見つけていた個人的な武蔵野とがありました。

(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

「田端文士村記念館」では田端で暮らした文人を紹介。芥川の家の模型(手前)も見られる

## おすすめの1冊

### 「田端文士村」

教科書の中の芥川龍之介は、ニヒルな文豪です。全集を読むと、快活な面やシニカルな含羞の下に隠された人情の機微が感じられもしますが、取材を重ねて書かれた本書の芥川はリアルで具体的です。「交際上手」で「下町人特有の世話好き」で名伯楽で「教化力」のある「田端の王様」が文士村の芥川像でした。

田端文士村
近藤富枝

(近藤富枝著、中公文庫)


# 武蔵野

本社 江東
立川 武蔵野

武蔵野支局 〒180-0006
武蔵野市中町1の13の1 3F
電話 0422(51)3131
FAX 0422(51)3133
musasino@yomiuri.com
都内版編集室
電話03(3217)1465・1466
江東支局 電話03(3631)6116
立川支局 電話042(523)4477
ホームページ
www.yomiuri.co.jp/local/

購読は 0120-4343-81

【広告】読売Palette 03(6272)9027
【折込チラシ】 0120-03-4343
【読売旅行】 03(5550)0666


■あすの暦

5月12日(水曜日)
旧 4月1日<仏滅>
通日 132
月齢 0.3
(正午)

=東京標準=

| | |
|---|---|
| 日出 4.39 | 満潮 4.43 |
| 日入18.37 | 17.49 |
| 月出 4.53 | 干潮11.22 |
| 月入19.01 | 23.37 |
| | (大潮) |